

気象変動に負けない稲づくり

～中干しで生育を調節し、コンパクトな稲姿につなげましょう～

夏の過高温やフェーン等の影響による品質低下（未熟粒発生）を避けるためには、過剰生育を抑制し適切な籾数を確保する稲づくりが大切です。

田植後25～30日頃からの中干しによる過剰生育の抑制や、効率的・迅速な水管理を行うための溝切りを確実に実施しましょう。

1 中干し ～茎数を把握し遅れずに開始しましょう～

(1) 目的

- ①ムダな茎の発生を抑え、適正な茎数（＝籾数）を確保する。
- ②下位節間の伸長を抑え、倒伏を軽減する。
- ③土壌へ酸素を供給し、根を健全に保つ。
- ④収穫時の機械作業が可能な地耐力を確保する。

6月第1週、又は田植後30日は中干し開始！と覚えよう！！

(2) 開始時期

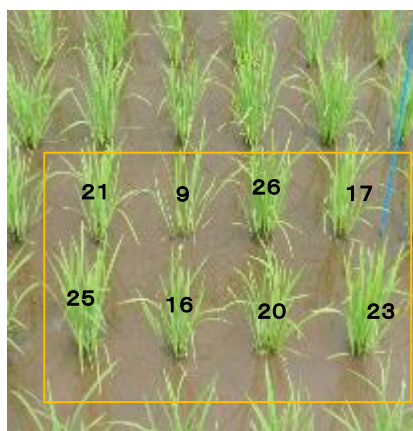
- ア 目標穂数の7割程度の茎数を確保した頃とする。
- イ 田植後25日を経過したら、茎数を数えて生育を確認し、遅くとも田植後30日をめやすに中干しを開始する。

【表 中干し開始時期のめやす】

栽植密度	茎数	
	コシヒカリ	こしいぶき
50株/坪	16本/株	19本/株
60株/坪	14本/株	16本/株

(3) 終了時期

- ア 田面に小ヒビが入るまでとし、生育量の大きなほ場では強めとする。
- イ 中干し終了時期が生殖生長期以降となると、根域が縮小し、高温年では品質が低下する場合があるので、遅くとも出穂1か月前をめどに終了する。



【株ごとの茎数の計測結果】
生育のよい畦畔際を避け、連続した5～10株の茎数の平均で判断しましょう。



【中干し適期を迎えたほ場】
株どうしの葉が重ならず、条間が見えています。これでも茎数は十分！



【中干し終了時の田面】
小さなヒビが入り、軽く足跡がつく程度までとします。

2 溝切り ～スムーズな水管理のために重要～

(1) 溝切り

中干しと合わせて、フェーン等の緊急時の迅速な灌水や、秋の長雨による停滞水の排水のため、溝切りを実施する。

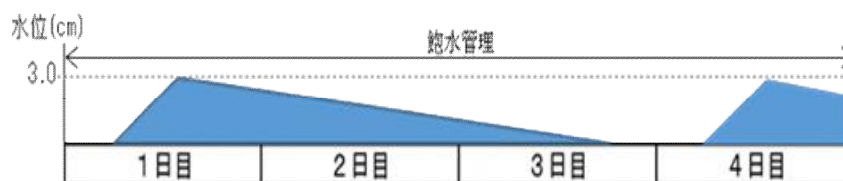
溝の間隔は2.5m程度（10aに6～8本）、深さは10cm程度を確保し、各溝の末端は必ず排水溝につなげる。

(2) 中干し後の水管理

中干し後の湛水は根の酸素不足による根腐れや、下位葉の枯れ上がりを生じさせやすくなる。中干し終了後は飽水管理に移行し、根の健全化や地耐力の維持を図る。



【溝は排水溝に連結】



【飽水管理】湛水し自然状態で田面の水がなくなり、溝や足跡の底に水が溜まっている状態を維持する。

3 病虫害防除

(1) いもち病(葉いもち)

いもち病は稲の重要な病害で、多発生すると収量・品質に甚大な影響を及ぼします。

ア 補植苗の撤去

伝染源となるため必ず撤去する。

イ 本田での発生の早期発見

薬剤での防除効果は発生初期ほど高いことから、地域の病虫害発生予察情報等に注意し、早期発見に努める。

ウ 発病時の対応（予防・治療剤の茎葉散布）

コシヒカリBL以外の品種では、発病時はただちに粉・液剤を茎葉散布する。

コシヒカリBLの場合は、農業普及指導センター等に相談し、発生量等に応じて防除の要否を判断する。



【葉いもちの病斑】

(2) 斑点米カメムシ類

斑点米カメムシ類は、休耕地や農道、畦畔で増殖し、稲の出穂後に水田内に侵入するため、草刈りなどでカメムシの密度を抑えておくことが重要です。

ア 草刈りは5月下旬から、カメムシの餌となるイネ科雑草が結実しない間隔で行う。

イ 特に地域一斉草刈りは、6月中下旬と7月中旬の2回実施する。